

循環型社会への模索 - われわれはどこからきてどこへいくのか -  
武田 信生 支部長（京都大学大学院教授・真宗大谷派西廣寺住職）

廃棄物学会関西支部設立記念講演

平成 14 年 11 月 29 日(金)

要旨

宗教から見た廃棄物

- ・「われわれはどこからきてどこへいくのか」の真宗での答えは「人は浄土からきて浄土へ帰る」であり、循環型社会と結びつけて考える必要がある。
- ・20 世紀社会は便利さを与えてくれたが、水車のあるような原風景を失った。
- ・水車は実は太陽によって動いているということに気付いてほしい。
- ・我々はエネルギー資源に頼っているが、いつまでも安価に確保できる状況にはない。20 世紀はエネルギーの集中消費、覇権エネルギーを可能にした。見えないところで膨大なエネルギーが使われていることを知る必要がある。
- ・現代は経済、環境、資源が三竝みの状態にあると言われるが、経済とは国を治め民を救済することが元々の意味であるから、経済と環境・資源が摩擦を起こすこと自体がおかしい。
- ・経の古い字体「經」はタテイト、道義、法則を意味する。仏教のお「経」も、道義が抜け落ちているとしっかりした人生は送れないということ教えている。
- ・従来は同時的価値観であったものが、通時的価値観に変わってきており、循環型社会の概念が出てきた。
- ・資源を地下から汲み上げるスピードと戻すスピードを同じにして、初めて循環型が成り立つ。それには太陽が必要である。
- ・江戸時代には循環型社会が成り立っていたが、環境施設の普及により伝染病等から身を守ってきたことも事実であり、現時点での循環を考えないといけない。
- ・ベーコン、デカルト、ニュートンに代表されるキリスト教世界の特徴は、自然を征服する概念である。
- ・一方、クラウジウスは、物質は利用可能なものから利用不可能なものへと変化するというエントロピー増大の法則を見出した。
- ・大阪万博で、スカンジナビア館は「工業化社会における環境の保護」を提唱し、技術が人類にマイナスに働くこともあるということを警告していた。
- ・見えないものが見えるということが非常に大事なことである。それは、麦 1 トンを生産するのに 1000 トンの水が使われているとすれば、麦 1 トンを輸入するということはその輸出国の水を 1000 トン使用している、ということに気づくということである。
- ・環境としてどこまでを意識するか。二千数百年前の釈迦涅槃図では、弟子達人間だけでなく、動物も悲しんでいる。仏教は動物や植物の存在を非常によく知っていた宗教で、それが失われている現代社会は、悲しむべき状態である。
- ・水は循環資源であるが、ガソリンは枯渇する資源である。しかし、価格はガソリンの方が安く、

資源価値が逆転している。

・我々は、太陽エネルギーが環境修復・循環を支えている半開放システムに生きていくことを認識しなければならない。

・昔は鎮守の森で子供が遊ぶ社会があった。宗教教育、環境教育が必要でない社会が必要であり、鎮守の森をどうするのか等を大人が考えるべきである。

・私の好きな絵に小倉遊亀さんの 1966 年の「径」という作品がある。我々は、失ってしまったこのような風景、清潔感を取り戻すためにもがいている状況なのではないかと思う。